

私立 小諸義塾

塾長 木村熊二



小諸義塾は、明治26年11月、小諸の青年小山太郎等の熱意ある要請にこたえて、木村熊二によって誕生した私塾です。

木村熊二は、明治初年アメリカに渡り12年の留学によって近代の西欧文化を身につけた新進気鋭の教育者であり、キリスト教の牧師でした。

生徒は、当時高等小学校を卒業し、なお向学の志に燃える近郷の青年で、遠隔の者には寄宿舎を与え寝食を共にしました。その後私立中学校認可を得、やがて島崎藤村等を教師陣に加えて充実した中学校教育へと発展しました。その背景には、町当局や有志、また郡会からの積極的な支援があったわけです。

しかし日露戦争を契機にして、個性的で自由を特色とする教育は国家的な教育制度に阻まれて、遂に明治39年小諸義塾は、13年間の短い歴史を閉じました。平成6年、校舎本館が市に寄贈されたのを機会に、旧地に近いこの地に復元して、近代教育のともし火を掲げた小諸義塾記念館としました。

小諸義塾の歴史

明治26年 耳取町で開校。

明治27年 校舎を大手門に移す、塾内に図書館を設ける。

明治28年 小諸町議会は補助金を可決。

明治29年 小諸駅南に塾舎本館建築。

明治30年 小諸義塾規則を定める。

明治31年 塾長木村熊二の書斎水明楼を建てる。木村熊二、井出静の発起により中棚鉾泉の発掘が始まる。塾舎一教室増築。

明治32年 私立学校令により県知事の認可があり、私立中学校の教育課程を実施。島崎藤村(国語・英語)、三宅克己(図画)教師として着任。

明治33年 小諸町議会補助金増額を決める。北佐久郡会も補助金3000円を決議。塾舎平屋建一教室増築。

明治35年 丸山晚霞(図画)三宅克己の後任として赴任。女子学習舎創立。塾舎一教室増築。



小山太郎



小諸義塾(小山周次画)

明治35年 義塾修業年限を四年に改め、月謝1円と改訂。

明治36年 義塾十周年記念式を挙行。

明治38年 島崎藤村「破戒」執筆中であったが原稿を抱えて小諸を去る。

明治39年3月 小諸義塾閉塾。塾長木村熊二長野市に去る。

個性にみちた教師たち

島崎藤村(1872～1943)

明治学院(現明治学院大学)本科卒業後、明治32年4月旧師木村熊二の招きにより英語・国語の教師として28歳で赴任する。同年、妻、冬と結婚、小諸町馬場裏に住む。

教師の傍ら明治34年に第四詩集「落梅集」を刊行、その後自然主義文学に転じ「旧主人・藁草履・爺・老嬢・水彩画家」などを次ぎ次ぎに発表する。

小諸義塾着任以来小諸の風土や小諸義塾の生活を題材にした「千曲川のスケッチ」は当時の小諸の様子を生き生きと今日に伝えている。



島崎藤村



三宅克己

三宅克己(1874～1954)

明治32年晚霞にひかれて来諸、図画教師として着任する。明治大正にかけての水彩画の先駆者。丸山晚霞とも親交があり、義塾において島崎藤村とは絵画や文学の上でのよき友であった。

丸山晚霞(1867～1942)

小県郡祢津村の出身、養蚕農家の次男として生れる。18歳で上京、水彩画を学び明治32年欧米に渡り、明治35年、三宅克己の後任として義塾教師となる。日本水彩画研究所の開設に尽力する。水彩画家小山周次は塾生以来の弟子である。



丸山晚霞

さめじま けい
鮫島 晋(1852～1917)

東京大学物理学科第一期卒業、東京物理学校(現東京理科大)創立者の一人である。明治28年小諸義塾の教師となり数学・物理・化学などを教える。

ぼうようとして、物事に頓着しない性格で閉塾後も長く塾生に愛された。藤村とも気心が通じ合い親交があった。義塾の最後まで深くかかわりを持った教師である。



鮫島 晋

文化に産業に、地域の開発を



開発当時の中棚鉾泉

塾長木村熊二は、教育やキリスト教伝道の他に、地域の開発に尽力した。

小諸においては、三岡に洋桃や苺の栽培を指導し、明治末から大正にかけての地区の一大産業に発展させる糸口をつくった。

また砂防の為に植えたアカシアは、現在大木となって各所に見ることが出来る。

明治31年には懐古園の南、中棚に鉾泉を発掘し、広く人々の憩いの場にすなどその業績は大きいものがある。



三岡の桃園